

令和 4 年 6 月 15 日現在

機関番号：22605

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2019～2021

課題番号：19K23321

研究課題名（和文）学び直しに至る背景と動機付け、及び学び直しによる心理・行動の変容プロセスの解明

研究課題名（英文）A study of the background and motivation leading to reskilling, and the process of psychological and behavioral change due to reskilling

研究代表者

三好 きよみ (MIYOSHI, KIYOMI)

東京都立産業技術大学院大学・産業技術研究科・教授

研究者番号：00845266

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、まず、学び直し経験者を対象としてインタビュー調査を行い、学び直しに至る背景と動機づけ、学びによる心理・行動の変容について検討した。次に、その結果をもとに広くアンケート調査を行い、社会人の学び直しを促進する要因について検討した。これらの結果から、人は環境の変化によって人生を振り返り、今後の生き方や仕事への取り組み方といったキャリア形成について模索し、学びへと動機づけられていることが確認できた。学びたいという思いから、実際に受験・入学へと至るプロセスには、社会貢献したい、最終学歴を上げたいという思い、具体的な学習内容、費用や時間の見込みが、影響を及ぼすことが示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の成果は、社会人の学び直しを促進するには、広い世代へのキャリア教育、および学び直し経験者の体験談や学習の内容といった学びの場の具体的な情報提供が、有効であることを示唆している。学び直し志向がない者には、キャリア教育によって、キャリアを振り返り、働き方や生き方を考えることが、学びへの誘いとなる。学びたいという意識はあるが、受験や入学という行動にまで至っていない者は、学び直し経験者から、学習内容や実際に得られた満足感や達成感、充実感を具体的に示されることで、学びを身近に感じ、実際に受験・入学するという行動が促進される。このように、学び直しを促進するための知見を提供できた。

研究成果の概要（英文）：In this study, first, we conducted an interview survey of those who had reskilled, and examined the background and motivation that led them to learn, as well as the psychological and behavioral changes resulting from their learning. Next, based on the results, we conducted a questionnaire survey to examine the factors that promote learning among working adults. These results confirmed that people are motivated to learn as they reflect on their lives due to changes in their environment and search for career development, such as how to live and work in the future. The results showed that the desire to contribute to society, the desire for a degree, and the prospect of cost and time have an influence on the process from the desire to learn to actually taking an entrance exam and enrolling in school.

研究分野：キャリア心理学

キーワード：学び直し リカレント教育 成人学習 越境学習 動機づけ リスキリング

1. 研究開始当初の背景

少子高齢化や国際化、情報化、科学技術の急速な進展など社会が激しく変化している今日においては、社会に出た後も新たに必要とされる知識や技術を身につけていくことが求められている。また、公的年金の支給開始年齢の引き上げや定年延長により、職業生活の長期化を踏まえて、自ら主体的にキャリアを形成していくことの重要性が高まっている。このような背景のもと、学び直しや再挑戦を行うことが推奨されており、日本においては、1990年以降、夜間大学院、修了要件の緩和、昼夜間講制、サテライト・キャンパス、通信制修士課程の設置などの制度化が進められてきた。加えて、2003年度には欧米型プロフェッショナル・スクールを企図した専門職大学院制度が創設された。

内閣府(2018)の社会人が大学などで学びやすくするための調査では、「学費の負担などに対する経済的な支援」「土日祝日や夜間など開講時間の配慮」が必要、大学などの情報収集で重視する情報として、「体験談や満足度調査の結果」「講座修了時に得られる証明書や称号」との回答が上位に挙がっている。文部科学省(2019)の調査では、学び直しの阻害要因として、「費用が高すぎる」「勤務時間が長くて十分な時間がない」「関心がない/必要性を感じない」「適合した教育課程がない」「受講場所が遠い」といったものが多く挙がっている。

社会人が働きながら学びやすくするための施策として、厚生労働省は、2016年に専門実践教育訓練給付金制度、追って、特定一般教育訓練給付金を創設するなど、教育訓練給付制度を充実させている。経済産業省の有識者研究会(経済産業省,2018)は、国内外の大学院や専門学校などで学び直すサバティカル休暇と呼ばれる有給の長期休暇制度の導入、および柔軟な勤務時間や学費補助などを企業に呼びかけ、働きながら学べる環境づくりを目指している。また、社員の自己啓発に対し、通信教育等の情報提供や金銭的援助などの支援を行っている企業も多い。

しかしながら、社会人が大学や大学院といった教育機関で学んでいる割合は他国と比べて極端に少ない状況にある(内閣府,2018)。このように、日本において、学び直しの促進に向けて、阻害要因等の調査研究が行われ、それらへの対応がなされてきてはいるが、学び直しを行っている人の割合は他国と比べてまだまだ少ない状態にある。

2. 研究の目的

本研究は、社会人の学び直しを促進するための知見を得ることが目的である。これまでは、主に学び直しの阻害要因や不安要素についての分析が行われてきた。本研究では、学び直しに至るには、どのような背景と動機づけがあるか、学び直しによって、心理・行動がどのように変容していくかを検討し、学び直しを促進する要因を明らかにする。

3. 研究の方法

本研究では、学び直しに至るまでの背景と動機づけ、及び学び直しによる心理・行動の変容について、まず学び直し経験者にインタビュー調査を行う。その質的分析結果から質問紙を設計し、広くアンケート調査を行い、結果を統計的に分析する。

(1) 半構造化面接によるインタビュー調査の逐語録の分析

学び直し経験者に対して、次の基本項目を基に半構造化面接法によるインタビューを行った。これまでの職業経験、仕事以外の活動の経験、学び直しの経験、講座への参加/大学院入学の背景と動機、学びによる変化、今後に向けた展望。対象は以下の3グループ計36名である。

- ① 社会人向け専門職大学院の修了者 16名 (30歳代～50歳代)
- ② シニア層向けスタートアップ講座の受講者 15名 (40歳後半～50歳後半)
- ③ 心理系社会人大学院の修了者 5名 (50歳代～60歳前半)

インタビューの逐語録を修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(以下、M-GTA)によって、概念を生成し、学び直しに至るまでの背景と動機づけ、及び学び直しによる心理・行動の変容について、ストーリーラインにまとめ、結果図を作成した。

インタビュー調査からは、次のようなプロセスが確認できた。学び直しに至るプロセスとして、まず、仕事や生活における環境の変化によって、人生を振り返り、今後の仕事への取組み方、生き方といった、自分のキャリア形成、及び仕事に対する価値を模索し、考え直すことがあった。そして、知識・スキルの習得や出会いへの欲求へと動機づけられ、それまで自分が置かれていた環境から、外に向けて意識がいくようになった。さらに家族や近い人の影響を受けての後押しがあって、大学院の受験や講座の受講といった行動になった。学びによって、知識・スキルの習得だけではなく、多様な仲間から刺激を受けて、視野が広がり、人脈もでき、仕事や生活の充実

感を得ていた。そのような学習行動によって、達成感や満足感とともに、将来への展望ができて、転職、資格取得、さらなる学びなど自己実現への行動をとっていた。

なお、学び直しの内容によって、以下のような特徴が確認できた。

- ① 社会人向け専門職大学院
大学院での体系的な知識スキルの習得は、すぐに実際の仕事に活用できるなど期待通りであった。年齢層も異なる多彩な仲間からは、チーム学習でのふるまいや幅広い知識スキルを学ぶことができていた。
- ② シニア層向けスタートアップ講座
キャリア中期に仕事環境や職場環境の変化があり、キャリアの見直しを行ったことで、学びへの欲求が高まり、最初の学び直しにあたる学習行動へと動機づけられていた。この学習行動で経験した達成感や充実感が、キャリア後期において定年が視野に入ったときに、学ぶことへの期待と見通しが立つことにつながり、再度の学び直しに踏み切る要因となっていた。
- ③ 心理系社会人大学院
キャリア初期までに、対人援助に関連した何らかの心残りの体験があったことが、キャリア中期において困っている人への支援やサポートがしたいという思いや、キャリア後期の心理系について専門的に学びたいという欲求となっていた。仕事や費用面などの制約がなくなることで、対人援助への気持ちがよりいっそう高まり、学びへと駆り立てていた。

(2) 質問紙による調査結果の統計的分析

全国のモニターを対象として、2021年8月にアンケート調査を実施した。社会人になってからの学び直しについての調査であることを踏まえ、年齢は、30歳代～60歳代を対象とした。社会人になってからの大学や大学院での学び直しの状況について、現在学んでいる・過去に学んでいた者、学んだことはないが学びたいと考えている者、今後も学びたくない者、それぞれ200名に割付し、計600名のサンプル取得目標を設定した。

アンケート調査項目は、関連研究、および(1)のインタビュー調査の分析結果を基に、以下の質問項目、及びフェイスシート（性別、年齢、職種、勤務先規模、学歴等）で構成した。

[質問項目]

・キャリア自律心理

堀内・岡田(2016)のキャリア自律心理尺度を用いた。本尺度は、「職業的自己イメージの明確さ」、「主体的キャリア形成意欲」、「キャリアの自己責任自覚」の3因子計12項目で構成されている。5（あてはまる）～1（あてはまらない）の5件法で回答を求めた。

・キャリア自律行動

堀内・岡田(2016)のキャリア自律行動尺度を用いた。本尺度は、「新しい職場環境への適応行動」、「キャリア開発行動」、「ネットワーク行動」、「主体的仕事行動」の4因子計15項目で構成されている。5（あてはまる）～1（あてはまらない）の5件法で回答を求めた。

・ソーシャルスキル自己評定

相川・藤田(2009)の成人用ソーシャルスキル自己評定尺度を用いた。インタビュー調査結果を参考にして、「関係開始」因子、「主張性」因子、「関係維持」因子から、それぞれ3項目の計9項目を採用し、4（かなりあてはまる）～1（ほとんどあてはまらない）の4件法で回答を求めた。

・仕事に関する価値観

江口・戸梶(2009)の労働価値観測定尺度(短縮版)を用いた。本尺度から、「社会的評価」、「自己の成長」、「達成感」、「所属組織への貢献」の4因子12項目を採用し、4（重要である）～1（重要でない）の4件法で回答を求めた。

・転職に関する考え方

「第8回世界青年意識調査」(内閣府、2019)の転職に関する考え方を参考に、1（つらくても転職せず、一生一つの職場で働き続けるべきである）、2（職場に強い不満があれば、転職することもやむをえない）、3（職場に不満があれば、転職する方がよい）、4（不満がなくても、自分の才能を生かすためには、積極的に転職する方がよい）から考え方に近いもの1つの選択を求めた。

以下は、現在学んでいる・過去に学んでいた者、今後学びたいと考えている者への質問項目

・学びたいと考えたときの仕事環境・生活環境

社会人になってから大学や大学院で学びたいと考えたときの仕事環境や生活環境について、12項目で構成した。その頃のことを振り返ってもらい、「はい・いいえ」で回答を求めた。

・学びたいと考えたときの心境

社会人になってから大学や大学院で学びたいと考えたときの心境について、12項目で構成した。その頃のことを振り返ってもらった。「あてはまる」～「あてはまらない」の5件法で回答を求めた。

・学びたいと考えたときの動機

社会人になってから大学や大学院で学びたいと考えたときの動機について、12項目で構成し

た。その頃のことを振り返ってもらい、「あてはまる」～「あてはまらない」の5件法で回答を求めた。

以下は、現在学んでいる・過去に学んでいた者への質問項目

・ **学びたいと考え、受験を決めたきっかけ**

社会人になってから大学や大学院で学んだ経験のある者に対し、受験を決めたきっかけについて、13項目で構成した。あてはまる」～「あてはまらない」の5件法で回答を求めた。

・ **学びで得たもの、感じたこと**

社会人になってから大学や大学院で学んだ経験のある者に対し、学びで得たもの、感じたことについて、13項目で構成した。あてはまる」～「あてはまらない」の5件法で回答を求めた。

・ **学びについて**

学び直しを行った大学・大学院の種別、学びの領域について回答を求めた。

アンケート調査結果について、学びたいと考えたときの背景(環境・心境・動機)、学び直しに至ったきっかけ、学びで得たもの、感じたことについて集計し分析した。また、現在学んでいる・過去に学んでいた者 210 名を[学び経験者]群、今後社会人大学院で学びたいと考える者 218 名を[学び志向者]群、今後も学びたくない者 215 名を[学び志向なし者]群の3群に分類し分散分析によって比較した。これらの分析から以下のような結果が得られた。

① 学び直しを志向した背景、学び直しに至ったきっかけ、学び直しによる変容

・ **学びたいと考えたときの背景** ([学び経験者]群、[学び志向者]群)

学びたいと考えたときの環境については、[学び経験者]群、[学び志向者]群いずれも、上位から、“仕事の先々がみえてきた”、“業務内容が変わった”、“仕事上で役割が変わった”、“仕事が忙しく、家と会社の往復だった”であり3割以上であった。“お金の余裕ができた”は、最下位であり1割に満たなかった。

学びたいと考えたときの心境については、[学び経験者]群、[学び志向者]群いずれも、上位から“何かにチャレンジしたい”、“悔いのないように生きたい”、“経験や能力を活かしたい”、“自分の思うように働きたい”、“これからの人生どうしよう”、“刺激が欲しい”であった。つづく、“社会貢献したい”は、[学び経験者]群 約5割、[学び直し志向者]群 約3割と差があった。

学びへの動機としては、[学び経験者]群、[学び志向者]群いずれも、“幅広い知見・知識を得たい”が、7割超と突出していた。“学位が欲しい”、“最終学歴を上げたい”の2項目は、[学び経験者]群 約5割、[学び直し志向者]群 約3割と差があった。

・ **学び直しに至ったきっかけ** ([学び経験者]群)

上位から、“学びたい科目や内容があった”、“学びための費用の算段がついた”、“学ぶための時間がとれる見込みがついた”、“通えそうな場所にあった”であった。

・ **学びで得たもの、感じたこと** ([学び経験者]群)

上位から、“視野が広がった”、“新たな考え方ができるようになった”、“学んでいるとき、毎日が刺激的であった”が約8割、“これからもなんらかの形で学び続けたい”、“学んでいるとき、毎日が充実していた”が“自主的に学ぶのは楽しいとわかった”が約7割、“自分もまだまだできるという自信がついた”が6割であった。

② 学び直し経験者・志向者の特徴

[学び経験者]群、[学び志向者]群、[学び志向なし者]群の分散分析の結果、キャリア自律心理の下位尺度である「キャリアの自己責任自覚」のみ有意差が確認できなかった。それ以外のキャリア自律心理の下位尺度「職業的自己イメージの明確さ」「主体的キャリア形成意欲」、およびキャリア自律行動、ソーシャルスキル自己評定、仕事に関する価値観、転職に関する考え方について有意差が確認できた。これらの尺度において、[学び経験者]群は、[学び志向なし者]群に比較して、いずれも高い値であった。

この結果から、学び直し経験者は、自分は何が得意なのか、何をやりたいのかという自己認識が確立されており、新しい環境や状況にも対応し、最新動向の収集、新しいネットワークづくり、主体的な仕事への取組みができている。また、組織への貢献や達成感に働くことの価値を求めている。ソーシャルスキルは高い傾向があり、知らない人とでも会話でき、その場にあった行動ができるといった特徴が示された。また、学び直し経験者、及び学び志向者は、キャリア設計が重要な課題であることを認知している。そして、自分の知識や技能について社会的に評価を得ること、および自分の成長に働くことの価値を求めている。また、自分の才能を生かすためには、積極的に転職する方がよいと考えている といった特徴が示された。

4. 研究成果

本研究の成果として、1点目として、インタビュー調査により、学び直し経験者が、学び直しに至るまでの背景と動機づけ、及び学び直しによる心理・行動の変容のプロセスを示すことができた。2点目として、インタビュー調査で得られた、学び直しを志向した背景(環境・心境・動機)、学び直しに至ったきっかけ、学び直しによる変容について、広くアンケート調査によって

確認することができた。これらの結果から、学び直し経験者、及び学び直し志向者の特徴を検討し、学び直しを促進する要因を明らかにすることができた。以下に、研究結果をとりまとめ、学び直しを促進するための施策を提案する。

まず、学び直し経験者は、環境の変化によって人生を振り返り、今後の生き方や仕事への取り組み方といったキャリア形成について模索し、学びへと動機づけられていることが確認できた。次に、学び直し経験者は、学びたいと考えたときの環境として、お金の余裕ができたという回答は1割未満、多忙であったという回答が約3割であった。よって、学びたいという思いと費用や時間の余裕については、関連が低いと考えられる。ただし、学び直し経験者の受験・入学したきっかけとして、費用の算段がついたこと、時間がとれる見込みがついたことが上位に挙がっていたことから、学びたいという思いから、実際に受験・入学へと至るプロセスには、費用や時間の見込みが影響を及ぼすと考えられる。一方、学び直し経験者と学び志向者において差が見られた項目として、社会貢献したい、学位が欲しい・最終学歴を上げたいという思いが確認された。これらの思いが強いのかも、実際に受験・入学へと至るプロセスに影響を及ぼすと考えられる。また、実際に受験することになるきっかけとして最も多かったのが、学びたい科目や内容があったという項目であった。このことから、幅広い知見・知識を得たいという漠然とした思いを持っているときに、学びたいと思う具体的な内容に遭遇する機会があることが、実際に受験・入学へと至るプロセスに影響を及ぼすと考えられる。

これらの研究結果を踏まえて、学び直しを促進するための施策として、広い世代へのキャリア教育、および「体験談や満足度調査の結果」など学びの場の具体的な情報提供を提案する。学び直し志向がない者には、キャリア教育によって一度立ち止まってキャリアを振り返り、その後の働き方や生き方を考えることが、学びへの誘いとなる。学びたいという意識はあるが、受験や入学という行動にまで至っていない者は、学び直し経験者から、学習内容や実際に得られた満足感や達成感、充実感を具体的に示されることで、学びを身近に感じ、代理体験できる。それによって、実際に受験・入学するという行動が促進される。また、大学院への受験・入学まで至らずとも、所属している会社や組織以外のコミュニティ活動への誘いとなり、コミュニティ活動での学びは、次の学びへの動機づけとして機能するであろう。

最後に、この数年は、COVID-19の影響により、様々なイベント等がオンラインになってきており、今後もこの傾向は継続すると思われる。場所や時間の制約が少なくなるとともに、コストも少なくすみ、新しい場への心理的なハードルも低くなっているのではないだろうか。このようなオンライン上での学びの場を有効に活用していくことも推奨したい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 6件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 三好きよみ	4. 巻 17
2. 論文標題 シニア層が学習行動へ至るプロセスの検討-シニア層向けスタートアップ講座の受講生を対象として-	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 キャリアデザイン研究	6. 最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 三好きよみ	4. 巻 15(1)
2. 論文標題 専門職大学院で学ぶ中高年社会人の学習動機と学習行動	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 横幹	6. 最初と最後の頁 4-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11487/trafst.15.1_4	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 三好きよみ	4. 巻 15
2. 論文標題 社会人が大学や大学院での学習行動へ至る 背景と動機についての調査結果	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 東京都立産業技術大学院大学紀要	6. 最初と最後の頁 213-218
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 三好きよみ，板倉宏昭	4. 巻 13
2. 論文標題 各専門職大学院でのシニア層を対象とした学び直しプログラム スタートアッププログラム受講者へのインタビュー、及びアンケート結果からの知見	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 産業技術大学院大学紀要	6. 最初と最後の頁 77-83
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Kiyomi MIYOSHI, Hiroaki ITAKURA	4. 巻 2019
2. 論文標題 A Recurrent Education Program for Seniors at a Professional Graduate School	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Proceedings of the 13th International Conference on Project Management	6. 最初と最後の頁 887-894
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 三好きよみ	4. 巻 14
2. 論文標題 女性のための就労支援講座の効果について	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 東京都立産業技術大学院大学紀要	6. 最初と最後の頁 63-69
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計14件 (うち招待講演 2件 / うち国際学会 1件)

1. 発表者名 三好きよみ
2. 発表標題 専門職大学院で学ぶ中高年社会人の学習動機と学習行動
3. 学会等名 第11回横幹連合コンファレンス
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 三好きよみ
2. 発表標題 シニアが起業を視野にいれた学習行動へ至るプロセスの検討
3. 学会等名 経営行動科学学会第23回年次大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 三好きよみ
2. 発表標題 社会人の専門職大学院入学の背景と学習行動
3. 学会等名 第68回年次大会・工学教育研究講演会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 三好きよみ
2. 発表標題 社会人の学び直しに至るプロセス シニア層向けスタートアップ講座参加者を対象として
3. 学会等名 産業・組織心理学会 第35回全国大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kiyomi MIYOSHI , Hiroaki ITAKURA
2. 発表標題 A Recurrent Education Program for Seniors at a Professional Graduate School
3. 学会等名 The 13th International Conference on Project Management (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 三好きよみ
2. 発表標題 IT 従事者のキャリア自律、仕事に対する価値観について
3. 学会等名 プロジェクトマネジメント学会2021年度秋季研究発表大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 三好きよみ
2. 発表標題 自ら主体的にキャリアを形成していくことの重要性とIT人材の学び直しの状況について
3. 学会等名 第17回情報システム学会 全国大会・研究発表大会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 三好きよみ
2. 発表標題 IT人材の学び直し志向と転職の関連性
3. 学会等名 経営情報学会2021年全国研究発表大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 三好きよみ，板倉宏昭
2. 発表標題 PBL型教育の遠隔化における課題と分析ーシニア向けリカレント教育の事例
3. 学会等名 第69回年次大会・工学教育研究講演会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 三好きよみ
2. 発表標題 社会人の学習動機と学習行動 心理系社会人大学院の修了者へのインタビューから
3. 学会等名 産業・組織心理学会 第36回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 三好きよみ
2. 発表標題 プロジェクトマネージャのキャリア形成と人材の流動性
3. 学会等名 プロジェクトマネジメント学会2021年度春季研究発表大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 三好きよみ
2. 発表標題 「人生100年時代」のキャリア形成－自分自身の人生を自らの手で設計する－
3. 学会等名 「しながわ学びの杜」東京都立産業技術大学院大学パートナーシップ講座（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 三好きよみ，酒森潔
2. 発表標題 オンライン環境におけるシミュレーターを活用したグループ演習によるプロジェクトマネジメント教育の事例
3. 学会等名 FIT2021 第20回情報科学技術フォーラム
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 三好きよみ，酒森潔
2. 発表標題 双方向オンライン環境におけるシミュレーター演習による初学者向けプロジェクトマネジメント教育の事例
3. 学会等名 プロジェクトマネジメント学会2020年度秋季研究発表大会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計1件

〔産業財産権〕

〔その他〕

2022年10月に以下を出版予定

著者名：岡田昌毅，尾野裕美，須藤章，原恵子，前田具美，三好きよみ，持田聖子
(担当：共著，範囲：第2章 シニア層はどのように起業を視野にいれた学びへと動機づけられるのか)
出版社：晃洋書房
書名：働くひとの生涯発達心理学 Vol.3：M-GTAによるキャリア研究

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------